るから、「依存している」つまり、特定されている。何がかという、対象が、どのように特徴づけられるかという「未来の」生じようとして、生み出されようとしているというのが「未来の」である。どのようにかという「何に」。[時間]を超越した存在は存在しないから。

(A49) 存在しているものはそれ自体から生じないし、他のみからも[生じない]。両者からもうた[生じ]ない。[それは]存在しているのでもなく、存在していないのでもなく、存在かつ非存在なものでもない。それでは、何から何が生じているのだろうか。

「生じない」つまり、発生しない。何がかという「存在しているものは」つまり、対象は、何からかという「それ自体から」つまり、自らの力によって、自らによる原因は存在しないから。剣の刃がそれ自身を切るような「もの」だから。例えは卓越した鋭い剣の刃が、自らを切断することはありえないだろう、まさにそれと同様に。「生じない」つまり、発生しない。何がかという「存在しているものは」。何からかという「他のみからも」つまり、行爲者のみから。総体としては存在しないから。「生じない」。何からかという「存在は」。そのような存在かという、「存在している」つまり、現に存在している。例えは存在している魂は、霊職人などの集まりによって作り出されることがありえないように。他など主客観に關してもまた同様である。「生じない」。何がかという「存在は」[現に存在しない]。子供の産めない女性の破れたらに關しては、現に存在しないから。「生じない」。何がかという「存在は」[存在かつ非存在]。自分が存在だから他は非存在であるという論理から。「ある」。何がかという「生起が」つまり、生成が。「何の」[何の]。34) ことからつまり、何から。いつかという「そのとき」つまり、その時に。34)

(A510) 生じていないものにおいて実体 (svabhāva) は存在しない。どうしてそれ自身から生じようか。まさに実体が存在しないことが成立することによって、他からさえも生じない。

「存在する」39) 何がかという「実体は」つまり、自己の本質は、何のためにかかという、「生じない」ために、つまり、不生のため。つまり、次のような対象にとって、「存在する」。何がかという「生起が」つまり、生成が。何からかという「自身から」つまり、自己の本質から。どのようにかという「どうし」と。つまり「どのよう」にしても何々ない。自己というものが離れているから。幻のように。「ある」。何がかという「不生が」つまり、生じないこと。何からかという「他からさえも」つまり、主客観などから。何にかという「実体が存在しないことが成立することによって」つまり、自らの、自己の存在であるところの自己に属するもの、その非存在の成立、つまり「非」存在の生成、まさにそれによって。どのようにかという「さえも」つまり、実に。

(A511) 自というものがある時、他というものがありうる。

他と自のものが「ある」時、自と自のものが考えられる。その両者の成立は「互いに」依存しており、彼岸と此岸のようなもののおおしやつた。

「svāt」つまり、ありうる。「他」というもの「が」つまり、他だという構想が。何がある場合にかかという「自」というものがある時「つまり、自己性が「ある」時、自己が「ある」時、という意味である。「考えられる」つまり、想定される。何がかという「自」というものが「つまり、自己だと把握するもの、何がある場合にか」という「他」というものがある時「つまり、他の自己が「ある」時。「存在する」。何がかという「成立が」つまり、確立ないしは世間の言語習慣が、ということである。どのように特徴づけられるかという、互いに「依存した」つまり、互いに頼りあう。何のかという「両者」つまり、他と自己の。どのようにかという、一方。どのような状態かという「成立が語られている」つまり、述べられている。何のようものとしてかという「彼岸と此岸のようものとして」つまり、向こう岸とこちら側とで彼岸と此岸、その両者の境目である。「彼岸と此岸」、その「よう」な」。

(A512) あるものを考慮しない時、どうして「一方の」あるものが生じようか。既ということを考慮しない時、どうして短いなどということが「生じようか」。

「考慮しない」つまり、考えない。何をかという「あるもの」つまり、構想されたものを。いつかという「次のような時」つまり、以下のような時に。「生じようか」つまり、「生じようか」。何がかという「あるもの」が。「どうして」。何からかという、構想されたものから。いつかという「その時」つまり、そのよ

34) b: ubhayaḥ に対する注釈がない。

35) これは注釈者の誤り。a: na を a: sṛā にかかると否定詞としてではなく、「ajātena」の修飾としてとっている。

うな時。「考慮しない」。何をかという「既い、というところを」。[既い] あるもの、というのがこのことばの意味するところである。いつかという「次のような時」つまり、以下のような場合に。「生じようか」。何がかという「短いなど」ということが「つまり、[短い] 事物が。[どうして]」つまり、どういう面から。いつかという「その時」つまり、そのような時に。

(A513) 存在性がある時、非存在性が「ある」。同様に、既いということがある時に、短いということが「ある」。何がかという「非存在性がある時、存在性が「ある」。それゆゑ両者は存在してはいない。

「ある」。何がかという「非存在性がある時、存在性がある時」と「存在性がある時」、真実を獲得した際、[その]否定が「ある」という論理から。どんな場合であれ、獲得が生じる「よ」な」対象、それは存在しないから、他の場合にも存在しない、ということ、つまり生じない、ということである。「ある」。何がかという「短いか」ということが「つまり、小さい事物が、何がある場合にか」という「既い」ということが「ある」時に。どのようにかという「同様に」。「ある」。何がかという「存在性がある時、何がある場合にか」という「非存在性がある時に」。例えは、どんな場合にも同様かという、他の場合では、靈が存在しないことを見て、まさかがある時に。例えは、このように、という知識が生じるように。「存在しない」。何がかという「よ」な」両者「は」つまり、存在性と非存在性は。どのような状態かかという「存在しつ」つまり、存在している状態。何ゆゑかかという「それゆゑ」つまり、[そういう] 理由から。両者の依存しあう方から。

(A514) そして同様に、一性と多様、また過去と未来など、また迷いと清浄さ、真実と誤り、[それらは] どうしてそれ自身で「存在しようか」。

「存在する」。何がかという「一性」と「一性」つまり、一つだけ呼ばれる把握が。同様に「存在する」。何がかという「多様性」つまり、多くの考慮というものが、どのようにかかという「そして」。「存在する」。「過去と未来などが」つまり、過去、未来、現在の時を考慮することが、どのようにかかという「また」。「存在する」。「清浄さ」と「誤り」つまり、輪廻を脱すること (śamśā-grahana) が。「存在する」。何がかという「真実が」つまり、ありのままの意味というものが。「存在する」。何がかという「誤り」つまり、正しい認識手段を欠いたものが。どのようにかかという「それ自身で」つまり、自己と自己に属する存在から。どのようにかかという「どうして」。どのようににも何々ない、という意味である。「以上のような二つは」互いに、存在しおらず、構想による誤りによって覆ねわねわっているから。

(A515) 実に、まさにそれ自身では存在しないあらゆる存在は、そのとき何であるのか。これが他である、と呼ばれるそれは、実体なしでは (vinā svabhāvataḥ) 「存在し」ない。

「存在しない」。何がかという「次のような存在は」。どのようにかかという「それ自身では」つまり、自己というものから。どのようにかかという「まさに」。なぜかかという、自己には語られたり語ったりする対象が存在しないから。どのようにかかという「実在」。何がかかという「存在が」。何がかかという「あらゆる」[存在]が。いつかかという「その時」、自身というものが存在しないから、他というものが「存在」[ある]、という論理から。「呼ばれる」。何がかかという「次のようなこれ」つまり、存在が。どのように特徴づけられるかかという「他の」と「呼ばれる」。何がかかという、そうして「存在は」。どのようにかかという「なしでは」。何がかかという「実体」つまり、自己性、自己の存在性の識別ができないから。

(A516) 他の存在 (他体) が無い時、諸存在の自体はない。そのとき、他に依存した、存在の把握への執着 (bhāva-graha-grahāḥ) にとらわれた「もの (svabhāva)」が、どうして存在しようか。

行爲者という考えを取り除くために、この問題によって述べる。「存在しない」。何がかかという「自体は」つまり、自己の存在性は。何のかかという「諸存在の」つまり、地などの物質の。「存在しない」。何がかかという「他の存在 (他体) が」。何のかかという、前に述べられた「諸存在の」。いつかかという、そういう時。自らが存在しないから、他もまた存在しない、という理由から。「存在する」。何がかかという「存在の把握への執着にとらわれた」[もの] が」。何としてかかという「どのような」として。誤った見解によって存在が非存在であるのに、「存在の把握」[ある]。つまり霊や衣服などの対象の把握が「ある」。故に對して、人だ、と間違えるように。このように特徴づけられる、存在の把握において「執着に」とらわれた「つまり、貪り、結びついた」。「存在の把握」はどのように特徴づけられるかかという「他に依存した」つまり、他によつて、つまり因